

# 甲虫コレクションガイド3 栃木県立博物館の甲虫コレクション

栗原 隆

〒320-0865 宇都宮市睦町 2-2 栃木県立博物館

Beetle collection of Tochigi Prefectural Museum

Takashi KURIHARA

## コレクションの歴史

栃木県立博物館は1982年10月に開館し、34年を迎えた。コレクションの構築は準備室段階から始められており、実際には40年近くの歴史がある。昆虫類のコレクションは、初代の昆虫担当学芸員だった樋口弘道博士がその礎を築いた。また、栃木県内のコウチュウ類については、栃木県内を7つの地域に分けて3-7年をかけて順に調査をおこなう「自然総合学術調査」で収集されたコレクションが大半を占める(表1)。集められた膨大な資料は、学芸嘱託員として約10年間在籍していた佐藤光一氏が可能な限り標準化し、分類群ごとに整理をおこなった。また、地域調査研究で得られた多くの標本は専門家により同定され、そのデータは報告

表1. 自然総合学術調査がおこなわれた地域と調査期間。

調査地域	調査期間
八溝地域	1982~1985
足尾地域	1986~1988
栗山地域	1989~1993
那須地域	1994~2001
高原山	2002~2007
平野部・丘陵部	2008~2012
日光地域 (旧日光市と旧今市市)	2013~



図1. 動物植物収蔵庫内の様子。日本産コウチュウ類が保管されているスペースは4列。

書等で公表されている(栃木県立博物館, 1990; 1994; 1997; 1998; 2001など)。そして、筆者の前任者である中村剛之博士(現弘前大学准教授)が在籍していた時期には、コウチュウ類の大半は分類群ごとに整理された状態になった。

現在はコレクションの利活用の促進のため、標本のデータベース化をおこなっており、データベース化が終了した日本産タマムシ科については、収蔵標本目録も出版されている(栗原, 2012)。

## コレクションの概要

栃木県立博物館の昆虫コレクションは、40万点以上にのぼる。そのうち、展示など普及教育活動用として集められた外国産標本は4万5千点ほどで、9割弱が日本産である。日本産昆虫標本のうち、コウチュウ類は最も多く、20万点を占めている。なお、これらの数には三角紙やタトウ紙に入っているなどのマウントされていない標本や液浸標本は含まれていない(図1-2)。

日本産コウチュウ類の標本は、未整理のドイツ箱から整理済みの箱へ移動する作業や、新たに収蔵された標本のソーティングを進めており、一部の分類群ではほぼ整理が終わっている(図3)。

コウチュウ類のタイプ標本はほとんどがセカン



図2. 1列で約180箱が収蔵されている。すでに棚は一杯で、溢れたドイツ箱が棚の上にも置かれている状態。

ダリータイプで、プライマリータイプはタマキノコムシ科の *Typhlocolenis furunoi* Hoshina, 2008 (図4)のみである。タイプ標本についてはプライマリー、セカンダリーにかかわらず、一般の標本とは別に保管する方針だが、全てを抜き出せていないのが現状である (図5)。

### 特徴的なコレクション

栃木県立博物館のコウチュウ類コレクションは、ほとんどが栃木県産である。また、日本国内の昆虫における栃木県の昆虫の特徴と比較するために収集された県外産の標本は、九州のものであれば違いがよく現れると想定され、重点的に集められたため充実している。さらに、前任の中村剛之博士が日本各地で収集したコレクションの多くも保管されている。なお、標本は研究などの利便性を考え、分類群ごとにソーティングして収蔵している。ほんの一握りであるが、以下にいくつかのグループについて紹介しよう。

### 日本産ハムシ科コレクション (図6)

科レベルでは最大のコレクションで、4万点以上が収蔵されている。中でもネクイハムシ亜科が充実しており、全体のおよそ1/4にあたる1万1千点以上を占めている。栃木県喜連川町 (現さくら市) がタイプ産地になっているアカガネネクイハムシの標本には、複数のパラタイプが含まれている。また、栃木県で近年の記録がほとんどなく、絶滅が心配されているキンイロネクイハムシは、5市町7地点で採集された標本が保管されており、宇都宮市から那須町にかけて比較的広く生息していたことが判る。

一方、ノミハムシ亜科やヒゲナガハムシ亜科など、種の同定が難しい分類群を含むグループについては、種レベルでの整理が終了していないものも含まれている。

### 日本産カミキリムシ科コレクション (ホソカミキリムシ科を含む) (図7)

約3万点が収蔵されており、そのうち約7割が栃木県産で、県内で記録されている9割以上の種



図3. 種ごとに整理が終わった状態。写真はナガタマムシ類の一部。



図5. コウチュウ類のタイプ標本。アカガネネクイハムシや、愛媛大学の吉富博之博士が記載したマルハナノミ類など、100点以上が保管されている。



図4. *Typhlocolenis furunoi* Hoshina, 2008のホロタイプ。栃木県立博物館で無脊椎動物 (昆虫を除く) を担当し、学芸部長を務めた古野勝久氏に献名された。

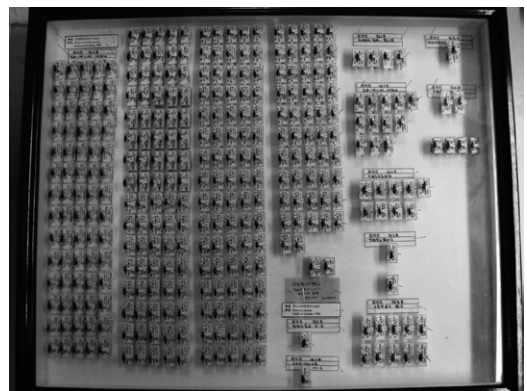


図6. 日本産ネクイハムシ類。分布がパッチ状の種が多いため、採集地ごとに整理されている。

類が含まれている。その中には、1990年に吉富博之博士（現愛媛大学准教授）が採集し、記録（吉富、1990）して以来、再発見されていないトウホクトラカミキリ、分類学的に検討の余地があるヤノヒメハナカミキリ種群など、貴重な標本が多数含まれている。

#### 日本産オサムシ科コレクション（図8）

点数は2万点強（ハンミョウ亜科は整理中のため、数に含まれていない）で、そのうちの1/3がオサムシ亜科に含まれる種である。オサムシ亜科以外については、足利市の大川秀雄氏に整理・同定をお願いし、種レベルでのソーティングがほぼ終わっている。

近年の分類学的研究に利用された例としては、収蔵されていたナガゴミムシの不明種1個体が未記載種だと判明し、2013年にモムラオオズナガゴミムシ *Pterostichus (Nialoe) momuranus* として記載され、パラタイプ標本に指定された（Morita *et al.*,

2013）ことが挙げられる。

#### 日本産デオキノコムシ亜科およびケシキスイ科コレクション（図9-10）

これらのコレクションはその大半を、それぞれのグループの研究者である小川遼博士と久松定智博士に同定していただいたコレクションで、今後、同定をおこなう際の参照標本としても価値が高い。また、調査の結果、両グループで栃木県から記録されていないと思われる種が含まれていたことも判っており、報告の準備を進めている。

#### 外国産コウチュウのタイプ標本

外国産コウチュウのセカンダリータイプは、クワガタムシ科2種で、台湾に分布するダイトンヒメミヤマクワガタ *Lucanus datumensis* Hashimoto, 1984と南米に分布する *Sphenotnathus lachaumei* Lacroix, 1983のパラタイプが収蔵されている。

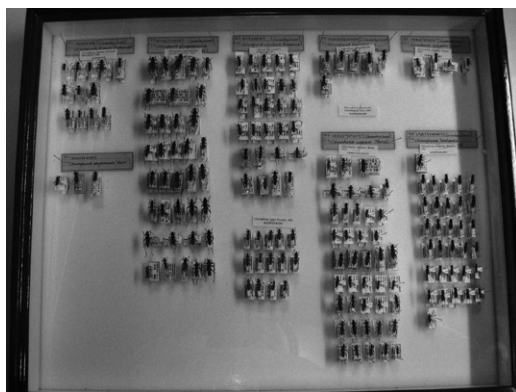


図7. 日本産カミキリムシ類。すでに現収蔵品の整理が終了し、データベース化も完了している。右下のブロックはトウホクトラカミキリで、一番上の個体が栃木県産唯一の標本。

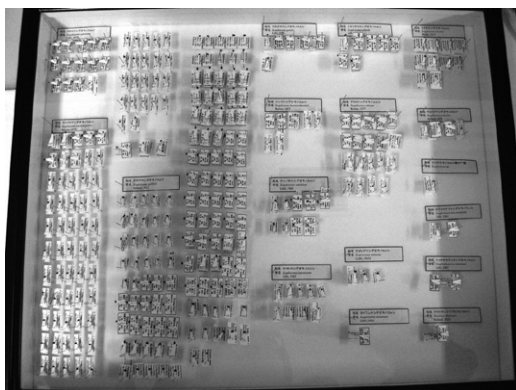


図9. 小川遼博士に同定していただいたケシデオキノコムシ類。これから全ての標本に同定ラベルをつける。

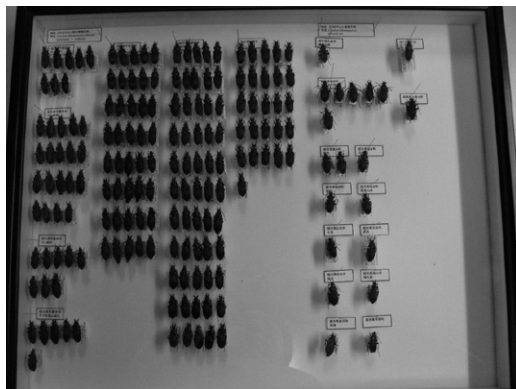


図8. 栃木県産クロオサムシの標本。県内には2亜種が生息し、移行帯も存在するため、各亜種と移行帯の3つに大別し、その中で採集地点ごとに分けて保管している。

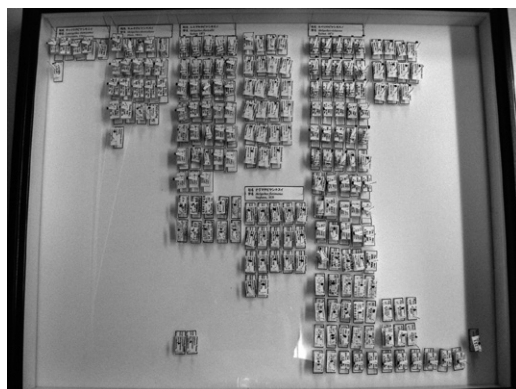


図10. 久松定智博士に同定していただいたチビケシキスイ科類。今後、データベース化を進める。



### コレクションのこれから

資料の収集については、これからも継続的に続けていく必要がある。たとえば、県レベルでのレッドリスト作成においては、それぞれの種の過去や現在の情報があつてこそ、生息地や個体群などの増減が把握できる（もちろん、そんなに簡単ではないことは承知だが）。とは言え、収蔵庫に収蔵できるスペースは無限ではないため、収蔵する資料はある程度の取捨選択が必要なもの事実であり、同じデータの大型種や県外産の昆虫類などは、必要最小限に抑えざるを得ないだろう。

収蔵資料の利用は、多岐にわたる。一般の人が博物館における資料の利用として思い浮かべるものは、まずは展示だろう（図11）。展示も広い意味での教育普及であり、他には講座や観察会、レファレンス時に実物標本を見せるなどの利用がおこなわれている。また、もう一つの柱としては、研究への利用である。昆虫の標本を使った研究というと、分類学的研究を思い浮かべがちだが、地域のファウナ解明の基礎を築く研究は、その地域に根

付く地方博物館ではより重視されるべきだと考えている。どんな生き物がこの地域にいるのか、その記録と証拠をセットで保存していくことは、地方博物館の役割であろう（図12）。とは言うものの、20万点を越えるコウチュウ類コレクションを分類学的研究に活かしたいと思うのは当然で、そのためには研究者が利用したいと思う標本がどの程度あるかを示すことが必要である。そこで、収蔵資料のデータベース化を進めるとともに、どんな分類群の標本がどの程度あるかだけでも把握しておく必要がある。現在では、日本産コウチュウ類については科レベルでおおよそ標本数を把握できている。また、日本産に限るがオサムシ科、コガネムシ上科、タマムシ科、カミキリムシ科などいくつかの科については、標本のデータベース化をほとんど終えており、コウチュウ目 58,831 点、その他の目も含めると 93,408 点の情報が HP 上で公開されている（<http://db.tochihaku.com/>）。標本の利用を希望する方は、筆者まで連絡いただきたい。

### 謝辞

本報告を纏めるにあたり、弘前大学の中村剛之准教授ならびに宇都宮市の樋口弘道博士、愛媛大学の吉富博之准教授、倉敷市立自然史博物館の奥島雄一博士には、原稿の校閲をいただいた。また、日ごろから多くの研究者、県内の昆虫愛好家の皆様に同定や整理のお手伝いをしていただいている。心より感謝申し上げる。

### 引用文献

- 栗原 隆, 2012. 栃木県立博物館収蔵日本産タマムシ科標本目録(昆虫綱:コウチュウ目). 栃木県立博物館収蔵目録, (15). 64 pp.
- Morita, S., H. Ohkawa & T. Kurihara, 2013. Two new macrocephalic pterostichine carabids (Coleoptera, Carabidae) from central Japan. *Elytra*, new series, Tokyo, 3(1): 9–17.
- 吉富博之, 1990. トウホクトラカミキリの栃木県における記録. 月刊むし, (238): 2.
- 栃木県立博物館, 1990. 八溝の自然(4). 栃木県立博物館研究報告書, (8): 143 pp.
- 栃木県立博物館, 1994. 足尾山地の自然(III). 栃木県立博物館研究報告書, (12): 109 pp.
- 栃木県立博物館, 1997. 栗山地域の自然(II). 栃木県立博物館研究報告書, (15): 65 pp.
- 栃木県立博物館, 1998. 栗山地域の自然(III). 栃木県立博物館研究報告書, (16): 63 pp.
- 栃木県立博物館, 2001. 栃木県立博物館研究報告書. 那須御用邸の動植物相. 栃木県立博物館, 宇都宮. 399+64 pp., 46 pls.

(2015年11月9日受領, 2015年12月8日受理)

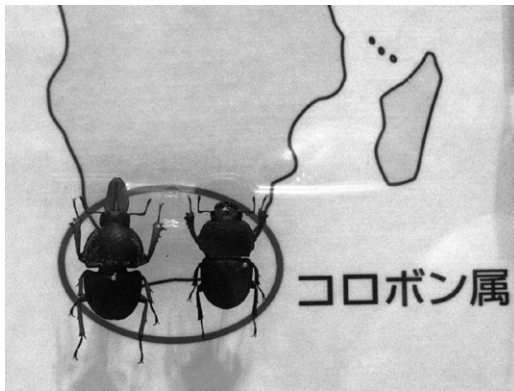


図11. 常設展示されているプリモスマルガタクワガタ。



図12. 地元紙の下野新聞で連載中の「お宝物語」で取り上げた、栃木県産オオウラギンヒョウモンの展示。記事に掲載された写真だけでなく、実物を見ただけの機会を設けている。